

主 題：蒔いた種は自分で刈り取る 2

聖書箇所：ローマ人への手紙 2章9－16節

既に、私たちが見て来たように、神の正しいさばきに関する二つの説明、そのさばきがどのようなものか、そのことをパウロは私たちに教えてくれるのですが、同時に、彼はこのさばきについて二つの説明を加えていました。

☆神の正しい審判とは？

1. 各人の行ないに応じたさばきである 5－10節

2. 常に公平なさばきである 11－16節

前回、私たちは1. 各人の行ないに応じたさばきを見たのですが、その中でパウロは、実は、人間には二種類の人々が存在するということを教えました。イエス・キリストを信じている人々と、そうでない人々、キリスト者とイエス・キリストに逆らう人々、反キリスト者です。彼らの特徴を紹介したパウロは、9節から彼らそれぞれに約束されている報い、さばきについて教えています。

(1. 各人の行ないに応じたさばきである → 3) 二種類のさばき → その続き)

詩篇62：12には「**主よ。恵みも、あなたのものです。あなたは、そのしわざに応じて、人に報いられます。**」とあります。旧約聖書から新約聖書を見る時に、私たちが教えられることは神が一人ひとりの行ないに応じて正しい審判をなさるということです。ローマ2：9－10には神が約束している二種類のさばき、その報いというものが記されています。二種類の人々に対する相応しい報いです。

ローマ2：9－10「**患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、悪を行なうすべての者の上に下り、：10 栄光と誉れと平和は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、善を行なうすべての者の上にあります。**」

1) 反キリスト者への報い 9節

まず、この9節には、前回も話したように、イエスを信じないイエスに逆らう反キリスト者に対する報い、彼らが受ける報いについて教えています。「**患難と苦悩とは……悪を行なうすべての者の上に下る**」とあります。ここに記されている二つのことばに、私たちは注目したいと思います。

(1) **患難**：「**患難**」とは、[圧迫、苦しみ]です。神からの大変な苦しみを彼らは経験すると言います。

(2) **苦悩**：この「**苦悩**」ということばは、辞書を見ると、確かに「**苦しみ、困難**」であるとその意味を知ることができますが、もう少し、このことばに関して専門的なギリシヤ語の辞典を見ると、このような意味が記されています。

(a) ローマ2：8－9において、この「**苦悩**」ということばの名詞形は旧約聖書同様に「**神のさばき**」を意味しており、それは、この世と、そして、次の世における厳しい苦痛と苦悩に言及していると定義しています。

(b) また別の辞書を見ると、このことばは「**場所が狭いこと、余地のないこと**」とそのような意味を持っていると言います。それは明らかに比喩的な説明です。ですから、旧約聖書を見ると、たとえば、詩篇118：5、そこでは「**狭い所**」ではなく「**広い所**」のことが記されています。今、私たちが見ていることばとは違いますが、「**苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。主は、私に答えて、私を広い所に置かれた。**」とあります。先ほど、この「**苦悩**」ということばが「**狭い場所**」であると言いました。それと全く相反することばがこの箇所に出て来るのです。「**広い所**」と、これも比喩的な表現を使っていますが、いったい、何のことでしょう？もう一箇所、IIサムエル22：20にも同じような表現が出て来ます。

「**主は、私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。**」、そうすると、この「**広い所**」というのは「**喜びの場所**」という意味で使われているのです。ですから、それに反する「**狭い場所**」というのは、喜びではない、苦痛の場所なのです。ヴァインというギリシヤ語の権威者は、彼の記している辞書の中で説明を加えています。「この「**狭い所**」というのは苦しみの所、なぜなら、「**広い所**」というのは、確かに、みことばを見るなら、喜びの所と訳されているから」と。

(c) もう一つ、おもしろいことを皆さんに紹介しておきますが、「**苦悩**」ということばは「**窮屈なこと、困窮難、困窮苦、この上もない苦しみ**」とそのような意味があると言うのです。おもしろいと思うのはこの「**窮屈なこと**」という意味のことばです。マッカーサー先生はこのことばに関してこのような説明をしています。「**死刑以外で独居監房に入れられることは最も重い罰である。地獄の苦しみの一部は解放や脱出に関する希望が全くない状態で、孤立し、孤独で、永遠に監禁されるという現実である**」と。つまり、先ほどから私たちが見ている通り、神に逆らう者、神の救いを拒み続ける者、神の救いを受け入

れない人々に約束されている報い、そのさばきはローマ2：9にある様々な苦しみです。しかも、その苦しみを私たちが見るとき、何となく、その場所が楽しそうな感じがします。地獄に行ってもたくさん友だちがいて、知っている人がいて、そこでわいわい楽しく過ごすのかというと、このことばがもっている意味はそうではなく、先ほど見たように、狭い窮屈な状態の中で孤立し、多くの人たちと交わるというのではなくて、孤独な状態で苦しみを経験し続けるということ、恐らく、永遠のさばきである地獄においては、そのような状態で苦しみを続けて行くのであろうと推測することができます。ですから、多くの人々が私の友だちの多くが地獄に行っているのなら、そこに行けば楽しいだろうと思うとしても、聖書はそのようには教えていません。みんなと話し合ってみんなと楽しくやっているというのでは決してありません。そこにある苦しみというのは私たちが味わったことのない苦しみであり、恐ろしいことは、その苦しみが終わることがないということです。Ⅱテサロニケ1：9に「**そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。**」とあります。つまり、このさばきは一時的なものではないことを明らかにしています。その滅びの刑罰は永遠にあると言います。黙示録14：9－11には「**また、第三の、別の御使いも、彼らに続いてやって来て、大声で言った。「もし、だれでも、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けるなら、：10 そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。また、聖なる御使いたちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。：11そして、彼らの苦しみの煙は、永遠にまでも立ち上る。獣とその像とを拝む者、まただれでも獣の名の刻印を受ける者は、昼も夜も休みを得ない。」**と、このようにヨハネが教えています。つまり、苦しみが終わることなくずっと続くとみことばによって警告されているのです。ですから、反キリスト者たち、つまり、このような恵みを知っていながら、神がいることも知っていながら、その神に逆らい続け、この神の救いの恵みを受け入れない人々、その人たちに約束されているのはこのような恐ろしいさばきであると言うのです。永遠に終わることのない「患難」と、そして、「苦惱」のさばきが彼らに与えられるとみことばは警告するのです。

9節の最後には「**悪を行なうすべての者の上に下り、**」とあり、このように神の恵みを拒み続けている彼らに相応しい報いであることは確かです。このように救い主を自らが否定し、そして、軽蔑する者たちには、悲しいことですが、相応しい報いであるということを見取することができます。

2) キリスト者が受ける報い 10節

10節を見ると、今度は「キリスト者が受ける報い」について教えています。クリスチャンが受ける報いです。そこには「**栄光と誉れと平和**」と三つのことが記されています。「**善を行なうすべての者の上に**」、ユダヤ人であろうとギリシヤ人であろうと、すべてのクリスチャンたちに対する報い、それがここに記されているのです。この10節にある三つの報いを見ると、実は、これは7節にも出て来ました。7節には「**栄光と誉れと不滅のものを求める**」と記されていました。ここでは本当のクリスチャンの姿を見ました。本当のクリスチャンとはこのようなものを求めながら生きている人々だと言いました。神の栄光のために生きる者であり、神から誉められることを望みながら生きる者であり、そして、永遠のものを待望しながら生きる者たちであると。そして、10節に同じことが記されていますが、これはクリスチャンがどのように生きるのかではなくて、クリスチャンはどのようなものをいただくかということです。

(1) 栄光のからだに変えられる

一つ目は「**栄光**」であると言います。私たちに約束されているのは、栄光ある主にお会いするとき私たちは「**栄光のからだ**」をいただくことです。この罪のからだから解放されて栄光のからだをいただき、主の栄光の中に招き入れられるのです。私たちが待ちこがれているすばらしい栄光のからだをいただくこと、それだけでも待ち遠しいことです。この罪のからだから解放される日がやって来るのですから。

(2) 称賛

二つ目に「**誉れ**」とあります。神からの称賛を求めながら、神から誉められることを望みながら生きている人々は、間違いなく、神から称賛をいただきます。神が誉めてくださるのです。「**良くやった、良い忠実なしもべ**」と言ってくださるのです。もったいないことばですが、神がそのように私たちの働きに対して相応しい報いをくださると言うのです。忠実に生きる者たちに対して神はそのようにすばらしい称賛を与えてくださるのです。

(3) 完全な平和

三つ目に「**平和**」と記されています。確かに、先ほど見たように7節とは違います。7節では「**不滅のもの**」でした。そこでは「**不滅のもの**」とは「滅びることのない永遠のからだ、また、新天新地」であると見て来ました。私たちがそこに入れられて、そこで私たちがともに過ごすとき、当然、私たちの心は

平和で満たされると思いませんか？そのような栄光のからだをいただき、そして、新しい天と新しい地に私たちが招き入れられるときに、私たちの心の中は何か問題で騒ぐようなことはもうありません。私たちの心は平和に満たされ続けるのです。平和に、そして、平安に。そのような完全な平和、完全な平安を私たちは神からいただくのだと言います。

これだけ考えるだけでも私たちは天を待ち望みます。こんなにすばらしい約束がもうすでに私たちに備えられているのです。クリスチャンの皆さん、あなたが一生懸命神のみことばに忠実に従って行くということは絶対に無駄なことではないのです。これ以上にすばらしい生き方はないのです。地上においても祝されるし、今見て来たように、天において主の前に立つときに、主はその歩みに対して祝福をくださるからです。私たち家族は夏になると家内の実家に帰りますが、島根県の浜田という所に非常に小さな教会があります。少ないときは先生とそのお嬢さんと二人だけの礼拝が持たれているような、そのような小さな教会です。その牧師先生が最近召されたのです。その教会も多分もう閉鎖されるでしょう。その先生はずっと定期的にニュースレターのようなものをお作りになって配布されていました。それを見ていると本当に感動しまし教えられました。非常に小さな働きで、新しい人が毎週訪れるわけでもないし、私たちが持っているようなオルガンやピアノもないし、このようなすばらしい建物もない、でも、あったのは何かというと、主を愛して、主に忠実に従おうという信仰心です。

失望しようと思ったらいくらでも失望できたはずですが、なぜなら、私たちが期待する成果がそこには何もありません。でも、神はそういうものを私たちに約束したわけではありません。神が言われることは「わたしに忠実について来なさい」ということです。結果がどうであろうと…。ですから、確かに、教会の規模から言えば小さなものです。しかし、間違いなくあの先生は神から大きな祝福をいただくことを私たちは知っています。なぜなら、忠実だったからです。私たちが地上において神からただ一つ求められていることは、「わたしに従って来なさい」、「わたしについて来なさい」、「わたしのみことばに従って来なさい」です。それが私たちに与えられた大きな特権であることをしっかり覚えることです。

多くの人々は、特にユダヤ人たちは自分たちは選民だから、特別だから、神が特別に扱ってくださると考えていました。特別なことから、きっと神は自分たちをさばくことなどあり得ないと彼らは思っていたはずですが、しかし、パウロが言いたいことは、「**ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも**」と、つまり、すべての人々に神のさばきは及ぶのだということを強調しているのです。「私はさばきを免れる」と思っている人たちに対して「本当か？」と問います。彼はこのみことばを通して私たちにそれぞれが自らを吟味するようにということをやをチャレンジし続けてくれるのです。ヨハネの福音書5：29でイエスはこのように言われました。「**善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。**」、みんなよみがえります。すべての人々は、人種に関係なく、民族に関係なく、性別に関係なく、年齢に関係なく、教育に関係なく、社会的地位に関係なく、一人ひとりこの世に生を受けた人間は一人ひとり神の前に立ちます。そして、善を行なった者は神からの祝福をいただき、悪を行なった者たちはよみがえってさばきを受ける、それが神の約束なのです。

神の正しいさばきについてパウロが与えた一つ目の説明は「各人の行ないに応じたさばき」でした。あなたが何をしたかに応じて神はさばきを下される、そのことを最初に教えてくれました。

2. 常に公平なさばきである 11-16節

二つ目の説明は11節から出て来ますが、それは「公平な神のさばき」だと言います。11節に「**神にはえこひいきなどはないからです。**」とあります。えこひいきのないさばき、公平なさばきというものがパウロによってここで教えられるのです。なぜ、神のさばきは公平なのか？分かりきったことですが、もう一度考えてみてください。

1) 神は正しい方であるから 11節

私たちのように不完全な人間なら、私たちのさばきにはいろいろな人情が入ったりします。でも、神のさばきは「**えこひいきがない**」、これは偏見とか不公平ということばです。偏見が全くないし、全く不公平でないと言うのです。私たち人間のように偏愛というものがありません。だから、神は公平なさばきをなさるのです。覚えておられますか？パウロが主人たちやまた、奴隷たちにどのように歩むべきかを教えました。エペソ人への手紙6章の所ですが、そこで主人たちに対してこのようにパウロが教えています。エペソ6：9「**主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。**」、神は人を差別しないと言うのです。私たちはなかなか難しいです。でも、神は差別されません。なぜなら、すべての人は神によって造られ、すべての人は神によって愛されているからです。

また、ペテロもそのことを学ぶのです。ユダヤ人であり、そして、自分たちが選民であると信じ切っていたペテロは、コルネリオという異邦人の人生に関わることによって大切なレッスンを学びました。皆さんもよくご存じのように、コルネリオの所に行ってペテロは伝道し彼が信仰に至るのです。その時にペテロは、もちろん、それまでに神の前に異邦人の所に行って伝道することなど考えられないということで、神との間に問答があるのですが、このようなことを教えられたとペテロが告白しています。使徒の働き 10 : 34 - 35 「そこでペテロは、口を開いてこういった。「これで私は、はっきりわかりました。神はかたよったことをなさらず、どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられるのです。」、このように大切なレッスンを学んだのです。「神はかたよったことをなさない」と、ユダヤ人だから特別なのか？ そうではない！ もちろん、ユダヤ人を神が選んだことには目的がありました。彼らを通してすべての人々に、この神のことを明らかにするためでした。彼が言うように「どの国の人であっても」、ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、「どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられる」と、神はその人を受け入れてくださる、その人に救いを与えてくださる。「神はかたよったことをなさない」お方であると言います。

ですから、神のさばきというのは、神のご性質と整合したものです。正しい神だから行ないにもことばにも偽りがありません。正しい神は嘘をつかないお方だから、言われたことを絶対に実行なさるお方です。神が言われたら必ずそうなります。神が救うと言われるなら救われるし、神がさばくと言われるなら必ずさばかれるのです。もし、ご自分の言ったことを訂正されるような方だったら神ではありません。正しい神というのは言うことばにおいても一切誤りがないのです。また、正しい神だから罪の汚れを容認することはできないお方です。なぜ、神のさばきが公正なのか？ 公平なのか？ それは神が正しいお方だからです。

2) すべての罪がさばかれる 12 - 13 節

二つ目に彼が教えている理由、12 節を見ると「すべての罪がさばかれる」と言っています。一部の罪ではない、すべての罪がさばかれるのです。さばかれないですむ罪は存在しないと言うのです。12 節「**律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます。**」とこのように言っています。「**律法なしに罪を犯した者**」とは異邦人のことです。このようなモーセの律法、また、それ以外にも様々な律法を彼らは自分たちで作り上げていくのですが、律法を受けていない人々とは異邦人のことです。彼らは「**律法なしに滅びる**」と言うのです。「**律法の下にあって罪を犯した者**」、すなわち、ユダヤ人たちは「**律法によってさばかれます**」。つまり、先ずパウロがこの12 節で言うことは、どちらであったとしても、異邦人であろうとユダヤ人であろうと、罪を犯した者は必ずさばかれるということです。しかし確かに、ユダヤ人たちは自分たちがさばかれるということに関しては、到底、その考えを受け入れるということは出来なかったはずでした。なぜなら、彼らは教えられた教えを一生懸命守り行なって来たと言っているからです。

そこでパウロはこのような説明を13 節に加えているのです。「それは、**律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。**」、この当時の様子を私たちは伺い知ることが出来ます。ユダヤ人の会堂においてみことばの朗読がされました。律法の朗読がされるのです。しかし、朗読がされる時にそこに集う多くの人々は、ただそれを聞いているだけで、それを実践しようと思わなかったのです。パウロは「**律法を聞く者が神の前に正しいのではなく、**」と言いました。そして、「**律法を行なう者が正しいと認められる**」と言います。この「**正しいと認められる**」というのは「**正しいと宣言される**」という意味です。だれが宣言するのか？「**神の前に**」と記されているように、神ご自身がある人々を「この人々は正しいのだ。この人たちは聖い。」と宣言されるということです。人がそのような宣言をするのではない、神がそのような宣言をするのです。では、神はどういう人を正しいと宣言されるのでしょうか？ 今見てきたように、「**律法を聞く者**」ではなく「**律法を行なう者**」だと言うのです。その当時もそうだったので、律法を聞いた者たちの責任はその命令を実行することです。申命記6 章に、モーセが新しい世代のイスラエルの人々にこのように語っています。6 : 1 「これは、あなたがたの神、主が、あなたがたに教えよと命じられた命令——おきてと定め——である。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、行なうためである。」、これが神が教えなさいと命じられた命令である、何のためにそれを教えるのか、これからあなたたちはヨルダンの地に入って行って所有している地において、その教えられていることを「**行なうため**」であると言っています。3 節「**イスラエルよ。聞いて、守り行ないなさい。そうすれば、あなたはしあわせになり、あなたの父祖の神、主があなたに告げられたように、あなたは乳と蜜の流れる国で大いにふえよう。**」、聞いたことを「**守り行ないなさい**」と言います。レビ記18 章でも同じことが言われていま

す。18：4「あなたがたは、わたしの定めを行ない、わたしのおきてを守り、それに従わなければならない。わたしは、あなたがたの神、主である。」とこのように主がモーセに対して告げられます。

ですから、律法の教えを聞いた者たちに神が望まれたことは、ただ聞くだけでなく聞いたことを実践しなさいということです。新約聖書にもこの律法に関して教えられています。パウロが教えているのですが、ガラテヤ3：10を見てください。「**というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**、つまり、神が律法をお与えになったときに望まれたことは「これを行ないなさい」ということです。そして、それを真剣に行なおうとした人たちは自分には出来ないということに気付くのです。そこで神の助けを求めるのです。「出ています！」と言うのはパリサイ人たちでした。「私は完璧に守っています！」と言うのは、その当時のユダヤ教の教師たちでした。本当は彼らは守っていないのです。ですから、聞いた者たちはそれを守り行なうという責任があります。もちろん、これは聖書の中のある一部の律法だけに言われるものではありません。聖書全体に関して神が言われることは「みことばを聞いたならそれを守り行なうように」ということです。神はそのように教えています。よくご存じのヤコブ1：22にはそのことが記されています。「**また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。**」と。1：25にも「**ところが、完全な律法、すなわち自由の律法を一心に見つめて離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならないで、事を実行する人になります。こういう人は、その行ないによって祝福されます。**」とあります。

ですから。旧約の人々も、新約の私たちも、どの時代にしようと、どこの国にしようと、神が私たち人間に望んでおられることは、神の命令に従いなさいということです。ただ聞くだけであってはならないのです。そして、私たちが知っていることは、神のみことばを実行しよう、それに従って行こうとする人々は救われている人々だということです。神がそのような思いを与えてくださり、そのように生きて行こうという新しい思いを私たちに与えてくださったからです。パリサイ人たちやユダヤ教の教師たちは、みことばを聞くこと、また、その知識をできるだけ多く蓄えることだけで十分であると思っていたのです。そこで、神はそのようなことで満足なさない、あなたがどれだけの知識を蓄えているかということよりも、神の関心はあなたがその聞いたみことばを実践しているかどうか、そこにあるのだと言うのです。ですから、ここでパウロはそのようなことをこの聴衆たちに教えるのです。これだけのことを知っていると言って満足している人たちに対して、どれだけ知っているかが問題ではない、それを実践しているかが問題なのだと言うのです。

3) 言い訳のできないさばきだから 14-15節

そして、14節から見てください。神のこの公平なさばきに関して、神は正しい方だ、だから、そのさばきは公平なのだ教え、また同時に、すべての罪が必ずさばかれる、だから、神のさばきは公平であると教えました。そして、三つ目に、パウロは14-15節で「**言い訳のできないさばきだから公平だ**」と言います。このさばきには「いい訳」はできないということです。14節「**律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身が自分に対する律法なのです。**」、パウロはおもしろいことを言います。確かに、律法のことは全然耳にしていなくても、律法の教えを受けていないかもしれない、でも、だからと言ってあなたがさばきを免れることができるかということ、とんでもない、異邦人であっても、律法を聞いてない者たちであっても、生まれながらに実は律法を行なっているのだ、これが証拠だと言います。というのは、私たちは生まれながらにある程度、何が正しいことであり正しくないことであるかを知っているのです。ある程度の判断ができるのです。だれからも教えられなくても、これは悪いことだと私たちは分かるのです。そして、これは正しいことであるということも分かるのです。だから、パウロは律法の教えを聞いていない異邦人でも、実は、律法の教えを行なっているのだと言います。例えば、人に優しくすることは良いことだと皆知っています。親切にすること、両親を敬うこと、年配の人に敬意を表わすこと、困っている人を助けることなど、このようなことは正しいことであると皆知っているのです。もちろん、いろいろな所でそのことを聞きました。でも、私たちの心の中にそのようなものがあるのです。また同時に、人に暴力をふるうこと、悪口を言うこと、嘘をつくこと、盗みを働くことなど、このようなことはみな悪いことだということも私たちは皆知っています。イエスを信じていない人たちは、神のために正しいことをしようなどと思ってもいません。神の律法に従おうなどとも思ってもいません。それは彼らにできないことです。したくないことです。しかし、創造主なる神を軽蔑し信じない人々でもこのようなことは知っているのです。不思議です。他の動物にはないのです。罪悪感をもつなどということはないのです。だから、パウロが

言うことは、律法を学んでいなくても、このように人はみな例外なくある程度の善悪を知っているということです。よく見るなら、今、話したことは律法に書いてあることです。両親を敬うこととか、正しいことをするというのは律法が教えていることです。だから、律法を一回も聞いていない人でも分かっている、その基準を持っていると言うのです。ですから、パウロは律法を学んだユダヤ人たちがそれを守らなければさばかれるように、学んでいない異邦人であっても、悪いことを行なうなら同じようにさばきを受けると言ったのです。彼はそのことについて三つの説明を加えています。

◎律法をもたない異邦人がさばかれる理由

15節「**彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。——**」

a) 行ない

「**律法の命じる行ないが彼らの心に書かれていること**」というのは、律法が人に要求する行ないのことです。律法が人間に命じること、要求することです。それが各人の心に書かれていると言うのです。今見て来たように、それが証拠に、別に特別に教えられていなくても、特別な場所に行き教えられることなく、正しいことを行おうとし、間違ったことを止めようとするのが私たち人間です。正しいことを行ない続け、間違ったことを止めようとするのは、心にある程度何が正しく何が間違っているのかを判断できる何かを持っていることの証拠だと言うのです。エレミヤ31:33にはこのように教えています。

「**彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——主の御告げ。——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。**」、ですから、私たちがよく分かっていること、子どもたちであっても、人々から教えられなくても、これは悪いことであるということを知っています。ですから、子どもたちは親の目を見ながら怒られるかなとそういう目で親を見ながら、自分のやりたいことをするのです。なぜでしょう？心の中に善悪を判断する基準があるからです。

b) 良心

二つ目にパウロが言うことは「良心」です。「**彼らの良心もいっしょになってあかしし**」と、確かに、人間にはある程度、善悪を判断する良心があります。この良心も私たちに、間違ったことをすればそれが間違いであることを悟らせてくれます。良心の呵責です。不思議なことですが、このような良心を持っているのは人間だけです。教えられなくても、嘘をつくことは悪いことだと分かっているのです。盗みを働くことは悪いことだと分かっているのです。生まれながらに、何をしても構わないのだという、そのような野蛮人的な状態で生まれて来ている人はいないのです。そして、「これは悪いことです、悪いことですよ！」と教えられて、そのような思いを抱くのもないのです。私たちはそのような思いを持って生まれて来ているのです。ですから、私たちは教えられなくても、間違ったことに対しては私たちの心が「これは違う、これは正しくない」と叫んでくれるのです。私たちが分かっていることは、この良心は放って置くと麻痺して行きます。間違ったことを行なうと良心が責めます。でも、それでも私たちは、その自分の罪を正して行こうとしないなら、罪に罪を重ねて行くときにその良心は段々麻痺します。パウロがIテモテ4:2でこのように言っているように、「**それは、うそつきどもの偽善によるものです。彼らは良心が麻痺しており、**」と。気をつけなければ良心は麻痺して行きます。悪に悪を重ねて行くなれば、いつの間にかそれがもう悪いことと思わなくなって来るのです。最初は悪いことと思いましたが。盗みを働くことも一回目はとても悪いことだと思った、でも、重ねて行くうちに段々その思いが薄れて行きます。皆さんも他のことでそのようなことがあるでしょう。いつの間にかその良心の声が段々小さく小さく消されて行く、そういうことが私たちのうちで起こるのです。でも感謝なことに、神はそうにして私たちのうちに良心を与えてくださったのです。律法を学んだからではない、律法を学んでいなくても生まれながらにそのようなものを持っているということです。

c) 思い・考え

三つ目にパウロが言うことは15節「**彼らの思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。**」、「思い」、「考え」ということです。「行ない」、「良心」、そして、この「考え」というのが、私たちにさばかれる理由がここにあるとパウロが説明することです。つまり、ここでパウロが言っていることは、「良心」とよく似ているのですが、私たちが正しいことを行なわなかったときには、心が責めるし、また、正しいことを行なったときには心が喜ぶと、そのような考え、思いが私たちのうちに出て来るということです。

いずれにしろ、パウロがこの15節で教えていることは、異邦人であろうとユダヤ人であろうと、律法を学んでいようと学んでまいと、すべての人間に共通しているのは、このような思いを神は私たちのうちにくださったのです。行ないを見たとき、私たちが間違っただけの行ないをするときに躊躇したりするのは、そのように神が私たちのうちに働いておられるからです。だから、律法を知らなくても何の弁解もできないと言うのです。そうすると、このような質問を私たちは聞いたことがあります。「福音を聞く機会がなかった人たちはどうなってしまうのだろうか?」、「福音が日本、また自分の故郷に届く前に亡くなった私たちの親、兄弟、親族はどうなってしまうのだろうか?」と。聖書は、今見たように答えをくれています。弁解できないというのです。なぜなら、見て来たように、自然界が創造主の存在を明らかにしている訳で、誰一人として神はいないということはできないからです。神がいることは知っていると言うのです。知っていながら信じたくない、そこに問題があると私たちは見て来ました。だれ一人弁解できないし、そして、私たちが今見て来たように、ある程度、行ないの善悪を判断できるから「あの人があのような悪いことをしている!」と、どうしてそのように言うのか、そのような基準が私たちのうちにあるからです。「悪い」と言いながら自分もそれを行っているということは、自分は悪いことを行なっている、正しいことを行なっていない、だから、さばきに服すると分かっている、私たちは行ないの善悪を判断することができるし、間違っただけの行ないをしたときに良心が私たちに責める、善悪をある程度判断できる思いが私たちのうちにあるのです。

ということで、だれ一人として、たとえ福音を聞いていなくても、たとえ聖書が届いていなくても、神はそのように私たち人間をお造りになったと言うのです。ですから、神の前に私たち一人ひとは責任を負っているのです。聖書を知らないかもしれない、でも、神がお造りになった自然界を見ると、私たちはその神を覚えることができ、その神に対して心を開きその方を受け入れるかどうかという責任がそこには生じるのです。すべての人間にはその責任があるということをパウロは教えているのです。

d) 人々の隠れたことをさばかれる

最後の16節を見てください。「私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって人々の隠れたことをさばかれる日に、行なわれるのです。」、もう一度パウロはここで「必ずすべての罪はさばかれる」ということに戻ります。神は「人々の隠れたことをさばかれる」とあります。だれがさばくのでしょうか? 16節にあるように「神がキリスト・イエスによって」人々をさばくのです。さばき主はイエス・キリストです。何をさばかれるのでしょうか? ここにあるように「人々の隠れたことをさばかれる」のです。神はあなたの隠れたことをさばかれます。なぜなら、神の前に隠れたことなど存在しないからです、神はあなたのすべてのことをご覧になっているからです。

イエス・キリストを信じておられない方、逆らっている皆さん、あなたはこの方の前に立ちます。そして、あなたはその時に知っているのです。神があなたの罪をすべて知った上で愛してくださっていたこと、主イエス・キリストがあなたの身代わりに十字架で死んでくださったこと、この主イエス・キリストを信じることで罪が赦されることを、そして、あなたは知っているのです、あなたはそれでいながら自分の意志でこの救いを拒んだことを。想像してみてください。どんなに恐ろしい状況なのかを。このすべてのことを知っておられる主によってさばかれるということ、そして、さばき主イエス・キリストのその手の釘の跡を見る時に、何の弁解も出来ません。彼は確実にあなたを愛していたのです。しかし、あなたがその方を拒んだのです。そこには永遠に取り返しのつかない後悔だけが残ります。どんなに後悔しても、そこでどんなに悔い改めても、そこには救いはありません! もうあなたは、その救いの機会を逃したのです。

クリスチャンである皆さん、どのような思い、どのような動機を持って主に仕えたかが明らかになります。何かしなければ人から何か言われるからと、そのような思いを持って奉仕をしているのなら悲しいことです。なぜなら、イエスはそのことをご存じだからです。いやだったけれど強制的にさせられたのですと、これも悲しいことです。神はそのことをご存じだからです。人や教会に認めてもらいたいから奉仕をしている、それも悲しいことです。見るところが違います。暇になったから、それも悲しいことです。どんなに忙しくても私たちは自分の好きなことには時間を割きます。なぜ、神のために割かないのでしょうか? 信仰的怠慢という罪悪感から逃れたいために、何かしていると自分が嬉しくなるし満足するからと、それも間違っています。「神の栄光のために行なう」、それ以外の動機はすべて間違っているのです。「神さま、あなたが私を救ってくださった。主よ、どうぞ私を使ってください。こうしてあなたに仕えることができるのは大きな特権であり、感謝なことです。もっと使ってください。」と、そして、私たちは主に自らをささげ続けて行こうとするのです。

あなたの信仰者としての生きざまはどうですか？神の前に恥ずかしいもの、申し訳ないものではありませんか？あなたは喜んで心から主の栄光のために一生懸命歩んでおられますか？パウロは私たちに言うのです、「必ずあなたは神の前に立つ」と。クリスチャンであるあなたには、確かに、罪のさばきはありません。しかし、あなたが信仰者として生きた、その人生に対する精算の日がやって来ます。その日に備えて生きておられますか？神の審判、それは正しいものです。なぜなら、この神は私たちのすべての隠れたことをご存じだから、その方をしっかり見ながら今日を生きることです。その方をしっかり覚えながら、感謝を持ってその方に仕えることです。「神さま、救ってくださったその恵みに感謝します。救い主であるあなたがどんなに素晴らしい方であるかを人々が知るために。それによってクリスチャンが励まされるように、どうぞ、私を使ってください。」と言うことです。皆さん、まだ手遅れではありません！今日からそのように生きることができます。そのような人、そのように生きて行こうとする人はここにいませんか？